

の外側部に扁平上皮癌が認められ内側部は炎症であった。症例 2 は 60 歳男性で主訴は右頬部腫脹。右上顎洞腫瘍を認め開放生検の結果扁平上皮癌と診断され、術前に 40 Gy が照射された。照射前、照射 1 か月後の FDG-PET と MRI を比較した。MRI では腫瘍の大きさに変化はみられないが、PET では FDG の集積程度と範囲が縮小していた。また PET で右耳後部リンパ節に集積があり手術により転移巣であることが判明した。症例 3 は 74 歳男性、主訴は左舌縁部腫瘍。生検にて扁平上皮癌と診断され術前 40 Gy 照射が行われた。治療前の造影 CT では腫瘍の位置は明瞭でないのに対し FDG-PET では舌の左側に FDG の強い集積を認め左深頸部リンパ節部にも集積がみられた。照射 1 か月後造影 MRI 冠状断像では腫瘍は舌の左側に淡く造影を受け、PET で同部は照射前に比し集積が低下していた。腫瘍全摘および頸部郭清術が施行されリンパ節転移が確認された。

舌、上顎洞癌において FDG-PET は原発巣のみならずリンパ節転移の検出に優れており、治療効果判定にも有用であった。

32. ^{99m}Tc -MAG₃ による腎クリアランス値の算出とその評価

末廣美津子 濱田 顕 立花 敬三
杉本 佳則 河中 正裕 福地 稔

(兵庫医大・核)

糖尿病性腎症における分腎機能評価の指標の 1 つとして ^{99m}Tc -MAG₃ による腎クリアランス値を算出し、その有用性を検討すると共に ^{125}I -OIH (OIH) による ERPF 値および ^{99m}Tc -DTPA (DTPA) による GFR 値との比較を行った。

尿蛋白、クレアチニン、BUN 値から糖尿病性腎症が疑われる糖尿病患者 19 例を対象とした。性別は男性 9 例、女性 10 例、年齢分布は 42 歳から 87 歳、平均 64.8 歳である。全例に水負荷後 MAG₃ を投与し、Russell らの方法に準じて一回採血法による腎クリアランス値を算出した。全例で前後 2 日以内に OIH による ERPF 値を、さらに 9 例では DTPA による GFR 値を算出し比較した。

MAG₃ の腎クリアランス値は右腎で 97.0 ± 56.3 ml/min、左腎で 88.1 ± 53.7 ml/min であった。一方 OIH による ERPF 値は右腎で 156.3 ± 94.5 ml/min、左腎で

138.7 ± 91.0 ml/min、DTPA による GFR 値は右腎で 45.1 ± 30.8 ml/min、左腎で 42.9 ± 36.1 ml/min であった。MAG₃ によるクリアランス値と OIH による ERPF 値とは右腎で相関係数 $r = 0.718$ 、左腎で $r = 0.894$ と有意の相関関係が得られた。また DTPA による GFR 値とは、右腎で相関係数 $r = 0.773$ 、左腎で $r = 0.765$ と、いずれも有意な相関関係が認められた。

糖尿病性腎症が疑われる症例の分腎機能の評価は臨床上必要であり、その評価における MAG₃ の腎クリアランス値は臨床的に有用な指標の 1 つであるとの結論を得た。

33. 原発性胆汁性肝硬変患者の腰椎骨塩量の経年的変化と活性型 Vitamin D による影響

正木 恭子 塩見 進 宮澤 祐子
城村 尚登 植田 正 池岡 直子
黒木 哲夫 小林 絢三 (大阪市大・三内)
小橋 肇子 岡村 光英 越智 宏暢

(同・核)

原発性胆汁性肝硬変 (PBC) では、しばしば骨病変を合併することが以前より知られている。今回、骨塩量測定装置を用いて女性の PBC および女性肝硬変患者の骨塩量の経時的変化を検討し、さらに活性型 Vitamin D 製剤による治療を行いその効果を検討した。

[対象・方法] 女性 PBC 46 例、女性肝硬変 64 例において第 2-4 腰椎の bone mineral density (BMD) 値を測定し健常例と比較検討した。さらに PBC 26 例、肝硬変 39 例において経時的に第 2-4 腰椎の bone mineral content (BMC) 値を測定し、そのうち PBC 5 例、肝硬変 17 例において活性型 Vitamin D 製剤 ($1\alpha, 25(\text{OH})_2\text{D}_3$) $0.5-1.0$ μg /日を投与し BMC 値の経時的変化を測定した。

[成績] 女性 PBC 患者の BMD 値平均は 30 歳代 0.998 g/cm²、40 歳代 1.020 g/cm²、50 歳代 0.771 g/cm²、60 歳代 0.619 g/cm² となり 50 歳代、60 歳代において平均値は有意に低下していた ($p < 0.01$, $p < 0.001$)。女性肝硬変患者の BMD 値平均は 40 歳代 0.886 g/cm²、50 歳代 0.794 g/cm²、60 歳代 0.689 g/cm² となり 50、60 歳代において平均値は有意に低下していた ($p < 0.01$, $p < 0.01$)。女性 PBC における未治療群の BMC 値の年平均変化率は -3.4% で有意の低下を認め、治療群の